

芭蕉米酒三百年記念

第55回

酒田俳句資料展Ⅱ期

2階 収蔵品展



開催期間 Ⅱ期 1989年6月13日(火)～8月6日(日)

開館時間 9時～16時30分

休館日 10月31日(火)まで無休

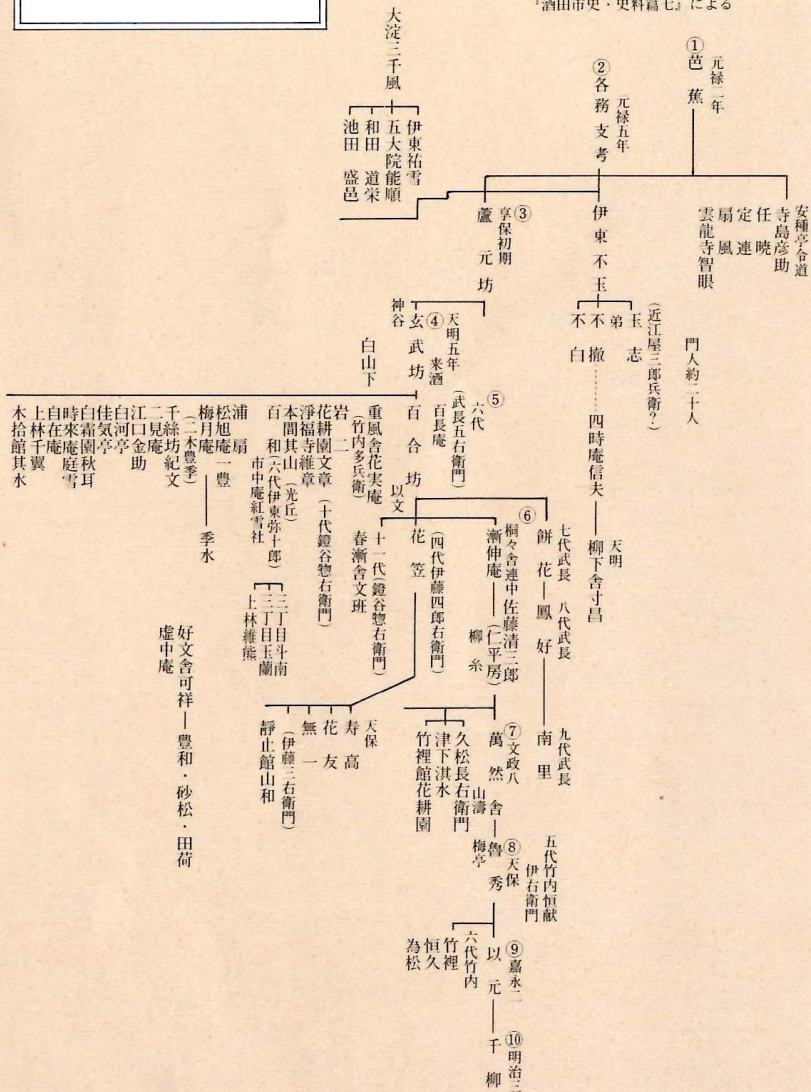
入館料 大人 100円 児童・生徒 50円

酒田市立資料館

酒田市一番町8-16 TEL (0234) 24-6544

酒田美濃派 獅子門

注、○内の数字は酒田美濃派宗匠系譜
『酒田市史・史料篇七』による

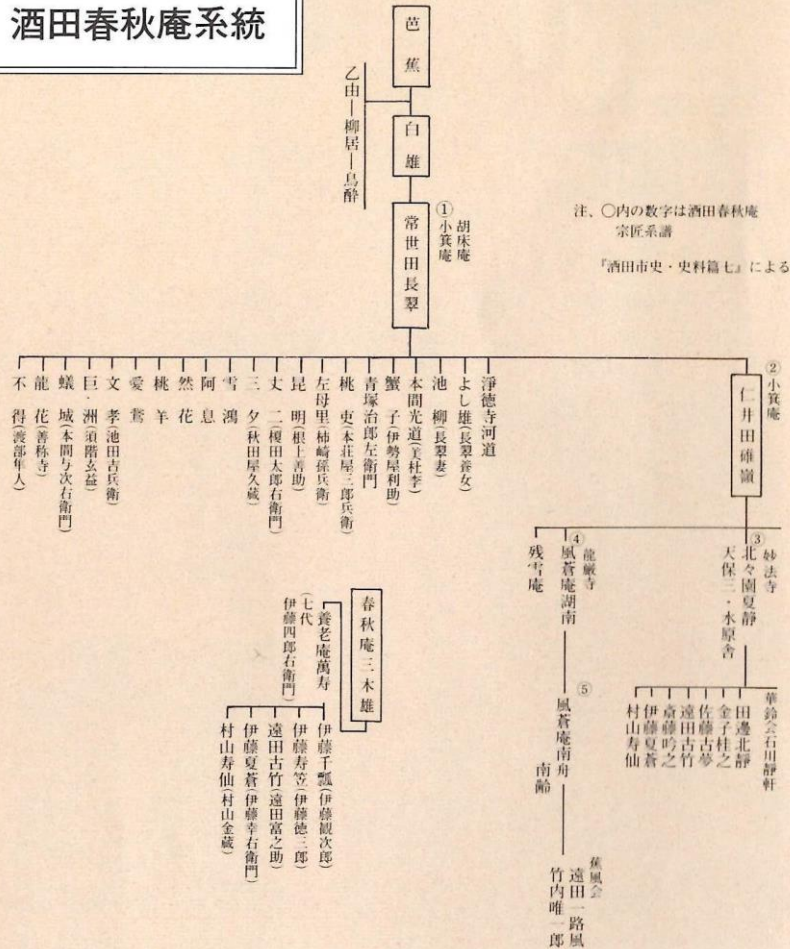


酒田の俳諧

芭蕉翁没後高弟たちは、各々蕉門の正統を唱えて道をひろめ、自ら各地に行脚するなど互いに勢力伸長に力を尽くした。こうした時代背景のもと、18世紀末の酒田の俳壇は美濃派の全盛とともに、伊勢派系春秋庵常世田長翠を中心とした派と二大勢力があった。

長翠は、酒田の浄徳寺住職河道を頼って酒田に来遊し、その後、本間家（光道・美杜李）の知遇を得て船場町に居を構え、門弟を増やし、天明の頃より文化文政に至る数十年間は、美濃派とともに絢爛たる文化の華を咲かせ、

酒田春秋庵系統



注、○内の数字は酒田春秋庵宗匠系譜
『酒田市史・史料篇七』による

「芭蕉翁像句賛」の読み

表紙

亡師芭蕉翁之像杉風画

木曾のかけ橋ノ辺りにて落馬致ければ
馬士うまかたに落さるゝ身は

木の子かな はせを

奥羽の四天王と称せられて知名の俳人の来遊も繁く、酒田の俳諧史上画期的な存在となった。

また、美濃派獅子門という礎を築いたのは玄武坊（白山老人）で、そのあとを継いだのが5世宗匠の百合坊であり、現在も武長家には、その証とされる「二見形文台」と玄武坊の書いた「三頼の図」が遺されている。その後、両派とも時とともに衰微していったが、春秋庵は「夏静」によって、美濃派は伊藤山和等によって再興され華を咲かさせたが、明治になって「万寿」を中心に流派をこえていりまじって栄え、近代酒田の句界へと受け継がれているのである。